

授業で使える当館所蔵地図

No. 11 『滑稽欧亜外交地図』

作成年：1904（明治37）年

サイズ：50×66 cm

作者：中村進平（関）小原喜三郎（案）西田助太郎（著・発行）



【解説】

本図が刊行された当時は日露戦争の開戦直後であり、ロシアを表す黒蛸の巨大さと8本の足の行方に筆者の風刺が描かれている。動物をモチーフにして、列強の力関係を風刺した作品は近代のヨーロッパでは珍しくない。しかし、ロシアを黒蛸に見立てて、その南下政策を風刺した絵地図としては、おそらく1840年にオランダで刊行された「滑稽な戦争地図」が最初だと考えられ、その他にも数々の似たような作品が残されている。1877年にはイギリス人風刺画家、フレデリック＝ローズによりそれとほとんど酷似した絵地図「真面目で滑稽な戦争地図」が発表されている。ヨーロッパ産の絵地図では北・東ヨーロッパと中東に限られるのに対し、本図ではそれらに加えて南アジアから極東まで範囲を拡大している。つまり、本図の左半分は完全なコピーに近く、その手法を応用して右半分を補ったものと考えられる。その点で、漫画史的価値は必ずしも高いとはいえないが、日露戦争期の日本人のロシア観や世界情勢の認識を知るうえで興味深い史料となっている。

★1 緒言・説明

本図の著作権・発行者である西田助太郎による緒言と説明が書かれている。「緒言」には具体的な氏名は載っていないが、イギリス人風刺画家フレデリック＝ローズによりロシアを「黒蛸」と嘲られていたことやロシアが黒蛸といわれても仕方がない…というロシアに対する西田の見方が書かれている。中には、「露国の遣り口は黒蛸に似ている」「黒蛸なるやつは性質澆刺として水面に飛躍するほどの肝玉もなければ、正々堂々隊伍を整えて遊泳するような勇気をもたない」といったロシアへの批判的な考えが綴られている。

「説明」には、「スペインは米西戦争以来疲れたのか、がっかりして眠っている」や「ハンガリーは伸ばしてくる黒蛸の手を切りつけてやろうとあせっているけれども…」など、黒蛸の足が各国にどのように絡まっているのか様子をとりえ、当時のヨーロッパ諸国の情勢を風刺しながら説明されている。

★2 地図上に示された国々の表記とロシアの8本の足

地図上に漢字で示された国々は次のように表されている。

露西亜…ロシア　西比列亜…シベリア　支那…中国　西藏…チベット　波斯…ペルシア
印度…インド　土耳其…トルコ　芬蘭…フィンランド　波蘭…ポーランド　獨逸…ドイツ
匈牙利…ハンガリー　瑞典…スウェーデン　那威…ノルウェイ　和蘭…オランダ
澳大い…オーストリア　佛蘭西…フランス　西班牙…スペイン　葡萄牙…ポルトガル

ロシアの8本の足が各国にどのような延びているかは、ロシアと各国がどのような関係にあったのか当時の国際関係を表している。向かって一番右の足は満州を縦断して清の左腕を巻きこみ、旅順口に向かっている。ロシアが清から敷設権を獲得し、着工した東清鉄道を指している。これに平服の朝鮮はおとなしく背を向けているが、軍服の日本は銃を発砲している。二番目の足は英領インドにさえぎられながらチベットの腕を掴んでいる（ロシアの進出を恐れた英軍はチベットに侵攻しラサを占領）。三番目の足はペルシアの首に（イランも英露の緩衝地帯化した）、四番目の足はトルコの足にそれぞれ巻きつき、五番目の足はクリミア半島を扼やくしている。さらに六番目の足はトルコ領内のバルカン諸国を押さえながら、地中海へと伸びている。近代のロシアは不凍港を求めて南下政策を展開したが、その最大の矛先が“瀕死の病人”と称されたトルコであった。また七番目の足はポーランド、八番目の足はフィンランドにそれぞれ巻きついて絞め殺している。

★3 小原喜三郎による英語の説明

小原喜三郎のサインにより記された英語の説明についての内容は下記のように邦訳される。

“黒蝟”はある著名なイギリス人により新たにロシアに与えられた名前である。黒蝟は大変強欲で、8本の腕を全ての方向に伸ばし、触れたものは何でも掴み取る。ただ、あまりに強欲なことが禍して、時に小魚によっても傷を負う。“大欲は無欲に似たり”という日本の諺の通りである。我々日本人は現在の戦争の原因について多く語る必要はない。黒蝟の存在が更に増すかどうかはこの戦争に係っているとだけ言っておこう。日本艦隊はすでに実質的に東洋におけるロシアの海軍力を全滅させ、陸軍も朝鮮と満州でロシアに顕著な勝利を収めようとしている。サンクトペテルブルクは…いつ？待て、そして見よ。醜い黒蝟！日本万歳！万歳！

【用語について】

○日露戦争時の国際情勢を理解できる。

日露戦争とは、大日本帝国とロシア帝国の間で1904年（明治37年）から1905年（明治38年）にかけて行われた戦争である。日本とロシアによる朝鮮半島と満洲を巡る利権争いが原因で勃発、満洲・朝鮮半島・日本海・樺太等を舞台に数多くの激戦が行われ、最終的にアメリカ合衆国の仲裁のもと、日露両国はポーツマス条約を締結し講和を結び、日本の勝利という形で戦争は終結した。

日露戦争は近代日本が初めて西洋列強と戦い勝利した、さらには近代ではじめてアジア人が西洋列強を退けた戦争であった。一方で、日本が帝国主義国の仲間入りを果たし、本格的に大陸へ進出する契機になった戦争という意味をもっている戦争である。

○南下政策

ロシアの南下政策の最大の目的は、年間を通して凍結することのない「不凍港を獲得すること」であった。人口や国土において西欧と比較にならない大国のロシアが不凍港を獲得し本格的に海洋進出を始めることに対して、並々ならぬ脅威を覚えた西欧諸国は、ロシアの南下政策を阻止することに非常な努力を注ぎ、この衝突が19世紀の欧州における歴史の大きな軸となる。

ロシア帝国の南下政策は、主にバルカン半島、中央アジア、中国及び極東の三方面において行われた。ロシア自身がスラヴ民族とギリシア正教圏の盟主を自負していたこともあり、バルカン半島においては汎スラヴ主義と連動し当地での民族国家樹立を後押ししたが、一方では宗教も絡み、オスマン帝国、オーストリア＝ハンガリー帝国との対立の要因ともなった。

○極東

ヨーロッパ・アメリカ及び経度から見て、最も東方を指す地政学上あるいは国際政治学上の地理区

分をいう。中国の四川省などから極東ロシア、朝鮮半島、台湾、日本にかけての地域を指す。

【利用の例】

○日清・日露戦争当時の国際情勢をビゴアの風刺画と合わせて活用してみる。児童にとっては、風刺画を通して国際関係や各国の思惑を捕らえる上では、たいへん興味深く、思考を伴うものである。

本滑稽欧亜外交地図は、日本と対ロシアといった関係だけでなく、欧州やアジア全土における国際関係をつかむことができる。

→絵地図の蝸の足がそれぞれの国にどのように絡んでいるのかを見つめさせ、地図帳と比較しながら現在の国名をそれぞれ調べたり、ロシアとその国の関係や立場の違いについて、想起させたりする活動を位置付け、日本人のロシアに対する見方について知ることができる。

→蝸の足がどのように伸びていくのか見たり、伸びていった先に何があるのかを考えさせたりする活動を通して、ロシアの南下政策について考えることができる。

→絵地図下部の「緒言」や「説明」の文章を読み取らせ、明治時代当時の文字や言葉でも読むことができる喜びを味わわせ、古地図を読んだり、古地図から読み取ったりする活動への意欲付けにかつようすることができる。